

特集：ブラジル

日系ブラジル人の活躍

島内 憲

2006 年から 2010 年まで丸 4 年間ブラジル大使館に勤務した。39 年 6 ヶ月に及ぶ外務省人生で最も忘れがたい日々であったが、特に印象に残ったのがブラジルの日系社会の存在感の大きさである。世界最大の日系社会が存在することの重み、そして、その有難さを外交の現場で仕事をする中で実感した次第である。

2008 年の日本人移住 100 周年記念行事の意義および成果

2008 年に各地で行われた日本人ブラジル移住 100 周年行事や関連事業の盛り上がりは、相当高かった事前の期待値を上回るものであった。日系人のみならず、非日系ブラジル人が熱狂的に皇太子殿下のご訪問をお迎えし、日系社会と一体となって各地の記念事業行事をオールブラジルで祝った。有力新聞、週刊誌が大型特集（ヴェージャ誌は 60 ページの 100 周年特集）を掲載したが、マスコミが移民関行事をこのよう大きく扱ったのは前例がないとのことである。そもそも、日本以外の国の移民の周年行事が行われた例はないようである。これは、移民国家ブラジルにおける日系社会の特別の地位を如実に物語るものであるといえよう。

移住 100 周年の具体的にどのような成果をあげたのか。一つは、ブラジルの日系社会、特に若い世代の日系人が日系アイデンティティを再確認する良い機会となったことである。ブラジル各地の日系社会で、それまで日系団体や日本とのかかわりが少なかった若い世代の日系人を巻き込んで、あるいは、そういう若者が中心

となって 100 周年関連の行事やプロジェクトが手作りで準備され実行されたこの意義はまことに大きかったと考えられる。もう一つの成果は、多くのブラジル人が一連の記念行事への参加を通じてブラジルの国づくりに対する日本人移住者とその子孫たる日系人の多大な貢献を再確認することができたことである。これらの行事が副次的効果として日本文化、更には日本そのものに対する一般ブラジル人の関心を高めたことはいうまでもない。なお、各地の 100 周年記念行事は多くの非日系ブラジル人の参加を得て行われたが、中には非日系ブラジル人が発案し、主導して行なわれた事業もあり、個人的に深い感銘を受けた。



ルーラ大統領と花火をご覧になる皇太子様
(写真提供：ケンブリッジ伯経済総合研究所)

ブラジルの日系社会の現状

以上のとおり、移住 100 周年を通じてブラジルの日系社会の健在ぶりが明らかになった。そ

れでは、ブラジルの日系社会は現在どのような状況にあるのか。結論から言えば、筆者は、ブラジルの日系人はこれから黄金時代を迎えようとしていると信じている。現在、ブラジルは世界で最も勢いのある国の一つとして注目を集めているが、こうした新しい環境の中で、日系人がブラジル社会において果たす役割も質的・量的に拡大している。一部に、「世代交代、混血によりブラジルの日系社会の衰退は避けられない」、或いは「このままでは日本との関係も疎遠になるだけではないか」といった懸念がある。



東洋人街とも呼ばれるサンパウロ市リベルダーヂ街
(写真提供：(株)シティ)

確かに、世代の交代が進み、3世、4世が働き盛りの日系人の大部分を占めるようになっていく。混血化が進んでいるのもそのとおりである。「青い目の日系人」にお目にかかったこともある。日本語ができる日系人が少なくなっているのも事実である。しかし、わが国と日系社会の関係が希薄にならなければならない必然性はない。今後、日本、ブラジル両国の相対的国力が急速に変化する中で、ブラジルの日系社会が母国ブラジルのみならず、わが国の中長期的繁栄のために重要な役割を果たす場面が増えるのではないかとさえ考える。その理由は次のとおりである。

(1) 一つは、ブラジルにおいて日系人が果たす役割の増大である。現在、ブラジルの日系人は、あらゆる分野で活躍している。日本人の移民が始まった当初、農業や商業に従事する人々が大部分であったが、次第に、弁護士、裁判官、医師、芸術家、地方議員、国会議員などと活動分野が広がった。最近では、連邦政府、地方政府、経済界、報道界などへの進出に目覚しいものがある。サイトウ空軍司令官、ウエダ司法最高裁判事、5人の連邦下院議員をはじめ国の要職についている日系人も少なくない。ビジネスの世界でも、ブラジル企業や外資系企業の経営幹部として活躍する日系人が目立つようになっている。もう一つ注目すべきなのは、日系エリート層の厚みが増していることである。筆者自身、ブラジリアで仕事をする中で、官庁街で働く日系人の急増を目の当たりにした。因みに外務省だけでも、約30人の日系エリート官僚が活躍している。

一方、現在ブラジルは、新興国の中で中国に次ぐ経済規模を誇る国として、日増しに国際的な存在感を高めている。経済が急速に発展するとともに、国際的な役割も増大している。こうした中で、各分野の担い手となる優秀な人材の確保が喫緊の課題となっているが、人材育成が追いつかないのが実情である。特に、技術系の人材不足が至上命題たる産業高度化の大きなネックとなっている。

こういう状況に即戦力として応えうるのがブラジルの日系人である。ブラジルーのエリート養成機関サンパウロ大学の卒業生の14%程度が日系と見られる。今こそ人材の宝庫である日系社会の出番である。

(2) 以上のような状況は、わが国にとってもチャンスである。日系人が活躍する分野が広がれば広がるほど、わが国との接点も多くなるであろう。今後、特に注目されるのが科学技術分野である。ブラジルとして、産業の高付加価値

値化という最優先課題を実現するために、わが国の科学技術力に期待するところが大きい、両国間の協力の中で、日系人が果たすべき役割の大きさは明白である。特に 2014 年にワールドカップ、2016 年にリオ・オリンピックを控え、ブラジルでインフラ建設ブームが始まろうとしているが、その数 5 万人にも上ると言われる日系エンジニア達が活躍する場面が益々多くなるであろう。

(3) ブラジルの日系人の日本に対する熱い思いは変わらない。このことは日系人と一緒に仕事をするなかで肌で感じた。大使館と日系人の付き合いには二種類ある。一つは、日系団体の行事への参加、協力などであり、狭義の「日系社会とのお付き合い」である。日系団体関係者は当然のことながら、わが国に対して、組織としても、個人としても強い思い入れがある。もう一つは、大使館の外交的任務の相手方がたまたま日系人である場合である。こういう場合においても、わが国に対する並々ならぬ関心と親近感が伝わってくるが多い。ブラジルの日系人、特にトップエリートは、日本語が出来なくとも、混血が進み風貌が西洋化しても、日本のルーツを誇りにしており、両国関係のために一肌脱ぎたいという強い思いを持っている。

わが国とブラジルの日系社会の結びつきは強固である。ブラジルの日系人は日本語能力の有無に係わらず、父祖の国に対して熱い思いを抱いている。しかし、われわれは、このことを当然視することはきない。両国間の特別の関係を長期的に維持するためには、双方の積極的取り組み、更に言えば、ブラジル側以上に日本側の努力が大切である。わが国として、日本のブランド力、そして、国、国民としても「良さ」を何としてでも守らなければならない。日本の国力、魅力が低下すれば、両国関係に必然的に影響するのみならず、ブラジルの日系社会にも迷惑をかけることになることを銘記する必要がある。

ある有力な日系人は、筆者に対し「我々ブラジルの日系人が日本に望むことは、日本が素晴らしい国であり続けること。それだけである」とのべていた。我々はこの言葉を真摯に受け止めなければならない。

出稼ぎの激減。ブラジルは移民受け入れ国に？

次に、在日ブラジル人社会の現状について考えてみたい。我が国のブラジル人社会は一つの転機に差し掛かっているように思われる。リーマンショックの直後、我が国で多数の在日ブラジル人が職を失い帰国を余儀なくされた。以来、在日ブラジル人の人口は減少の一途を辿っている。現在、我が国のブラジル人コミュニティの人口は、リーマンショック直前のピーク時の 31 万 5 千人に比べ、10 万人程度減少していると見られ、遠からず、(中国人、韓国人・朝鮮人に次ぐ) 第 3 位の座をフィリピン人に明け渡すのではないかとと言われる。

個人的には、現在の、在日ブラジル人の減少傾向は、単に我が国の景気動向や雇用情勢によってもたらされた一時的現象ではなく、より長期の流れの中で見べき動きではないかと見ている。

そう考える最大の理由は、ブラジルが移民のネット受入国になる可能性が高く、既にその流れが始まっているからである。現在ブラジルは、急速な産業発展の中で、労働力不足が成長のネックになり始めている。特に、技術者及び熟練労働者の絶対的不足は深刻な問題になり始めており、賃金高騰、一部業種の業績悪化の原因になっている。こうした中で、質の高い労働力の確保が喫緊の課題となっている。また、ブラジルが目指す経済の先進国化、特に科学技術力の強化と経済の高付加価値化が所期の成果を上げれば、世界中から優秀な人材が集まってこともあり得る。一言で言えば、ブラジルは、今後、米国のような移民受け入れ国への道を歩む可能

性があるということである。米国が世界中の優秀な人材を受け入れながら、世界最強の国となった過程を振り返ると、ブラジルが同じ路を辿ると考えるのは荒唐無稽なことではない。ブラジルは米国と同様、人を引き付ける魅力を持つ国である。現に、以前より、近隣国からの労働者流入がブラジル南部で増えていると言われており、最近ではハイチ人による大量不法入国の試みが話題になった。欧州経済が厳しい中で、ポルトガルをはじめとする欧州の高学歴者が職を求めてブラジルに渡りはじめていると聞く。新興国へのパワーシフトは人の流れの面でもはっきりと表れはじめているということである。

それでは、今後日本への出稼ぎはどうなるのか。日本経済が回復しても、在日ブラジル人数

が元に戻ることはないかもしれない。ブラジル経済は今後、右肩上がりの成長を続けることは確実であり、そういう中で、教育水準が高く優秀な日系人の就業機会は確実に増えるであろう。

一方、わが国では先行き不透明感が漂う中で、ブラジル人の出稼ぎが今までどおりに続くのか、不安なしとしない。これは、日本の産業にとって不安要因であると同時に、人的交流、文化交流の観点からも残念なことである。いずれにせよ、ブラジル人の出稼ぎを当然視できる時代は終わった。このことだけは、銘記しておく必要がある。

(しまのうち けん 前駐ブラジル大使)

【ラテンアメリカ参考図書案内】

『グローバル化の中で生きるとは 日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』

三田 千代子編著 上智大学出版（発行）、ぎょうせい（発売）

2011 年 10 月 332 頁 1,905 円+税

2009 年に立ち上げた、大学の歴史学、経済学、教育学、社会学、宗教学、人類学の研究者と地方自治体や公益法人で対応している 10 人の専門家がアンケート調査も含めて行った調査研究の結果を取り纏めたもの。

日系ブラジル人の就労に関わる日本企業の雇用政策、特に集住地での地方自治体の多文化共生に向けての対応、在日ブラジル人子弟教育とブラジル人学校、移動にともなうアイデンティティ形成、宗教生活とともに、送り出し国であるブラジルとの関係、在日ブラジル人と在日ペルー人との生活戦略の違い、在日第二世代のホームランド選択と受け入れるホスト社会の問題点の研究に加えてアンケート調査結果による解説も付して総合的に考察している。

【桜井 敏浩】